

# 『日本の産科は世界トップクラス』 なのに、今! 安全な分娩管理を受けられない 「お産難民」が50万人?

## 日本の産科医療が危機的状況にあります!

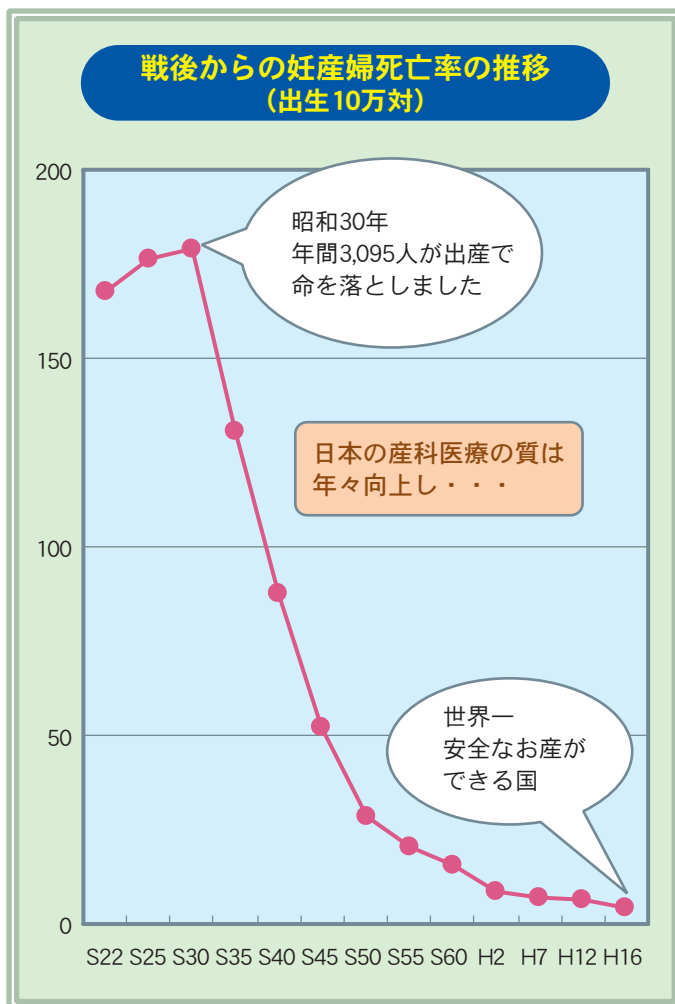
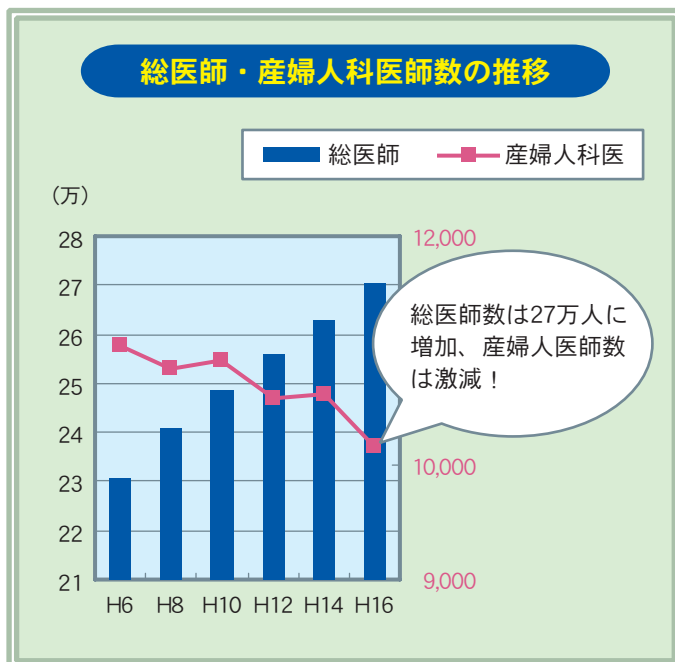
今、産科を閉鎖する病院・診療所が急増しています。少子化、医師・助産師不足などが原因とされていますが、実は、産科医療に対する一般の方々の誤解もその原因の一つなのです。このままでは、安全な分娩管理を提供する産科医療施設は激減し、いわゆる「お産難民」が全国で50万人になると試算されています。そのような危機的状況を回避するためにも、産科医療について正しく認識して頂き、より安全で快適なお産をめざす私たち産科医の思いを知って頂きたいのです。

## 誤解 その1

### "お産が安全なのは当然"という「安全神話」

昔の女性にとって、お産は"命懸け"でした。例えば、今から51年前の昭和30年のデータによると、年間3,000人強の女性がお産で命を落とし（妊産婦死亡率161.7：出産10万対）、10万人以上の赤ちゃんが胎内で、あるいは生まれてすぐに亡くなっていました（周産期死亡率43.9：出生1000対）。当時は、病院や診療所での分娩はわずか2%しかなく、ほとんどが自宅分娩だったため、適切な医療を受けられなかったからです。

その後、医療の進歩とともに、国民皆保険制度のもとで質の高い医療を受けることができるようになるにつれて、死亡率は飛躍的に低下しました。病院や診療所など医師の管理する医療施設での分娩が99%になった平成16年には、お産で亡くなった女性は49人、亡くなった赤ちゃんは5,541人になり、世界トップクラスの安全なお産ができる国と胸をはれる結果となりました。ところが近年、医療施設に来られる妊婦さんの多くは、"安全なのは当然"という「安全神話」を盲目的に信じています。そのため、結果が悪いと原因をすべて医療側に求める風潮があります。これでは、産科の医師はたまりません。産科医のなり手が少なくなったのは、「安全神話」が普及したことと無縁ではないのです。



すなわち、今も女性にとってお産が"命懸け"であることには変わりはありません。私たち産科医は今後も、より安全で快適なお産をめざす努力を続けてまいります。そのためにも、"お産が安全なのは当然"という前提に立った「安全神話」は払拭して頂きたいと願っております。

	妊産婦死亡数 (率：出産10万対)	周産期死亡数 (率：出産1000対)
昭和30年	3,095人 (161.7)	10万人以上 (推計)
平成16年	49人 (4.3)	(H15) 日本 (5.0) 米国 (7.1) 英国 (8.2)

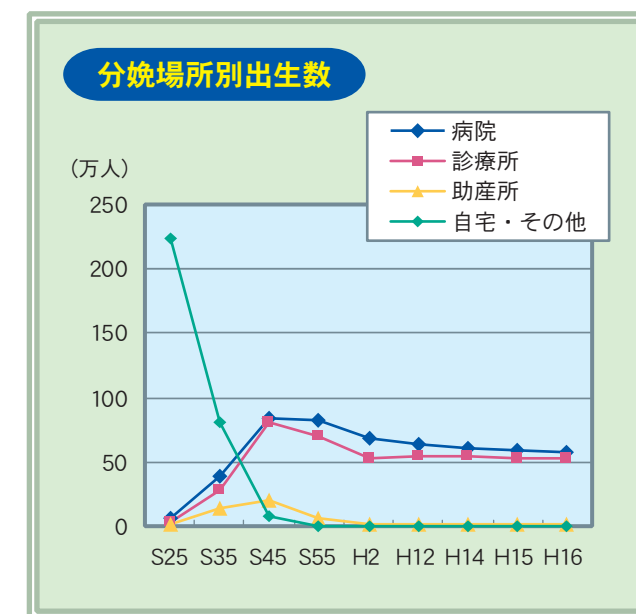
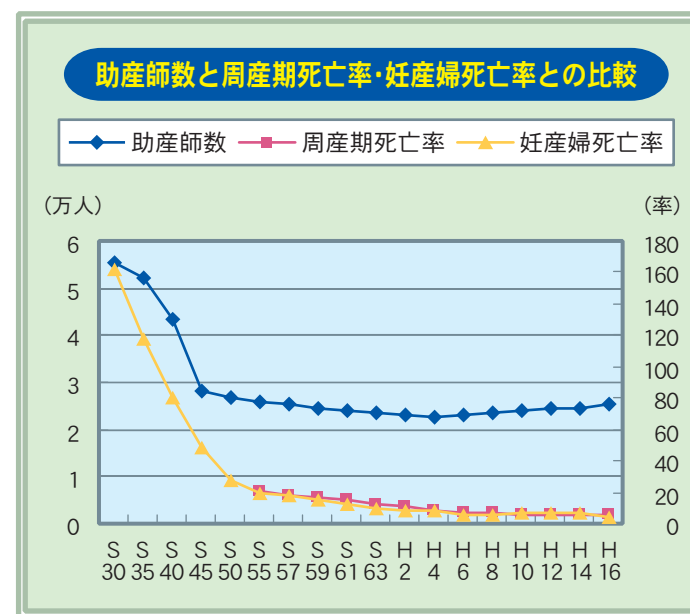


## 誤解 その2 "助産師がいなくてお産ができない?"

世界トップクラスの安全なお産ができる国になった時、マスコミは「分娩に医療行為は必要ない」「お産は自然がいい」と煽りました。某テレビ局の朝の連ドラでも自宅分娩を推奨するような内容のものを放送しました。「自然なお産に医療はいらない」「医師は自然なお産をしない」「助産師は自然なお産を推奨している」だから「お産の中心は助産師だ」よって「助産師がいなくてお産ができない」という誤解になったのです。

自宅で出産するのが当たり前だった時代、その介助役として活躍したのが"お産婆さん"でした。そして、戦後の混乱期で医師も医療施設も少なかった昭和23年、医師法の例外措置として、医療行為を必要としない正常な分娩についてのみ"助産婦(現在、助産師)が行ってもよい"とする法律ができました。医療行為をしないのではなく、やってはいけないのです。行えば医師法違反、つまりニセ医者と同じことです。

分娩は、ハイリスクや異常の発生により医療行為が必要になることがあります。そのため、医療行為を唯一認められている医師が分娩の管理をしなければなりません。産婦人科医師は、正常、異常にかかわらず、あらゆる分娩に対応できる専門家です。そして、助産師・看護師・検査技師・薬剤師などのスタッフと一丸となって医療を行って来たからこそ、現在のような"世界トップクラスの安全なお産ができる国"が実現したのです。



(出典：厚生労働省統計情報部)